



創世ホール名画観賞会 27

「湾生回家 (わんせいかいが)」

1月20日(土) 2回上映

①10時半～ ②14時～

会場●3階多目的ホール

入場料●大学生・一般/前売1000円(当日1300円)、小・中・高、シニア(60歳以上)の方は当日のみ1000円

作品●「湾生回家」(2015、台湾、111分) 出演=富永勝、家倉多恵子、清水一也ほか 監督=ホアン・ミンチェン エグゼクティブプロデューサー=チェン・シュエンルー

■我が故郷、わが台湾。敗戦後、この日本に戻っても、いつも心は台湾にあった。湾生とは日本統治下の台湾で生まれた日本人のこと。歴史に翻弄され、台湾を離れた日本人「湾生」。彼らが「故郷」に寄せる積年の思いを描いた傑作ドキュメンタリー。湾生たちは自分たちの存在が歴史の間に埋もれ、忘れ去られようとしている中、台湾への深い思いを語り続けます。歳月の壁と闘いながら、家族や友人たちを、共に過ごした場所を、心に留めおくために幾度となく台湾に向かいます。時間と空間を超えた人間同士の友情と家族の絆の物語。感涙必至。北島町中村の富永勝さんも冒頭から出演しています。各回上映前に富永さんの舞台あいさつあり。この機会をお見逃しなく!



サエキけんぞう講演会

日本にロックができるまで

ムッシュかまやつ、大瀧詠一、加藤和彦
パイオニアたちの知られざる闘いを語ろう!

2月4日(日) 14時30分～

会場●3階多目的ホール 入場無料

講師●サエキけんぞう(アーティスト、作詞家、千葉県在住)
演題●「日本にロックができるまで!～ムッシュかまやつ、大瀧詠一、加藤和彦～パイオニアたちの知られざる闘いを語ろう!」

主催●北島町立図書館・創世ホール
特別協賛●徳島大学歯学部、(株)リットーミュージック、(株)アビック、いぬん堂、テレグラフファクトリー

■現代の日本はJ-POP時代。J-POPの原動力はロックだった。そのロックは一夜にしてできたのではない! ■ロックを切り開くために苦闘した先人たちの知られざるエピソードと、貴重音源を紹介しながら、日本ロック創生期の真実を解き明かす。徳島大学歯学部出身の俊才・サエキけんぞうが、第二の故郷・徳島で今縦横に語る日本ロック誕生秘話! ■貴重な機会です。お聴き逃しなく!



サエキけんぞう氏講演会関連特別展示

1月中旬～2月4日(日)

場所●1階図書館カウンター前スペース

■サエキけんぞうさん講演会に関連して、少年ホームランズ、ハルメンズ、パール兄弟などのサエキさんが関わったグループ、サエキさんが歌詞を提供した沢田研二などの作品、ムッシュかまやつ、大瀧詠一、加藤和彦関係の録音盤や書籍資料等をドカンと展示します。■しかも、株式会社アビック寺田成社長のご厚意で、県内TSUTAYAグループでもサエキさんの特別コーナー設置など、宣伝ご協力をいただくことになっています。寺田成氏は12月28日に東京でサエキさんと会い、この件について協議完了しています。



文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

「パレードへようこそ」をめぐって

■12月9日の「徳島レインボー映画祭」で上映された「パレードへようこそ」は、立派な作品だった。英国の炭鉱労組が長期のストライキに突入し、それをロンドンの同性愛者のグループが支援し交流する物語である（実話をもとになっている）。サッチャー政権から切り捨てられ苦闘を強いられた炭鉱労働者と、世間から疎外されがちなマイノリティの人たちの、しいたげられた者同士の連帯の構図だが、そこに至るまでは当然のことながら平たんではない。支援者たちはバスを運転し、ウェールズの炭鉱地帯に行くのだが、そこは田舎であり偏見も根強い。炭鉱労組の側にも、性的マイノリティの人たちによる支援を快く思わない人たちがいる。最終的には苦勞の果てに大きな資金援助やバスの寄付などの実現に至るのだが、もちろん多くの挫折や焦燥も描かれる。

■ラストが大変感動的である。ロンドンでのレズビアン&ゲイ・パレードの時に、主人公たちのグループは、主催者から「君たちは人数も少ないのだから隊列の最後尾にまわれ」と言われていたのだが、そこに主人公たちを応援するために英国各地から炭鉱労組のバスが続々と到着する。そして「君たちのグループが一番人数となった。先頭で行ってくれ」と主催者から要請されるに至るのだ。

■ラストのテロップが泣かせた。以下大意。「労働党の規則には性的マイノリティの条項が長いこと記載されることはなかった。だが、その年に同条項記載の決議がなされた。それは、ある有力労組が強く主張したからであった」「その名は英国炭鉱労働組合」。

■そして、パレードには炭鉱労組の百年前に作られた伝統ある初代の旗（横断幕）が高く掲げられる。そこには、手と手ががっちり握られた（連帯を描いた）絵が描かれている。映画は、その映像で終わる。

■表面的には、巨大な国家の力の前に後退戦を余儀なくされたとしても、多くの人の意識を変える第一歩を踏み出したことは、社会の深い部分でのすばらしい前進と言ってよい。根源部分での勝利と言ってよいのではないか。

■例えばスタンリー・キューブリック監督作品「スパルタカス」で、確かにスパルタカスは十字架に磔にされ処刑される。しかし、カメラが上空にパンするとそこには遠くまで続く一筋の道がみえる。それは、昨年の四方田犬彦さんの講演会で取り上げていただいた白土三平の『忍者武芸帳』における影丸の発言につながるものだといってよいと思う。（以下は大雑把な要約）戦いに敗れるかもしれないが、勝負は問題ではない。大事なものは目的に向かって近づくことだ。自分が死んでも後を継ぐ者が必ず出る。破れても、人々は目的に向かって、多くの人が平等に幸せになる日まで戦うのだ。そして武士も百姓もない世の中が来る。百年先か、千年先か、きっと来る。

■キューブリックは「スパルタカス」ラストのロングショットでその千年ほど未来の、よりましになった世の中への一筋の道を描いたのだと私は思う（そのように確信する）。描き方は違うが、「パレードへようこそ」のラストの手と手を握り合った横断幕は、同じベクトルの（同じ方向性の）力強いメッセージであることとらえたい。その日私は、試写会と本番との2回この映画を見たが、2度ともラス

トで鼻をかみ続けていたのだった。

●「パレードへようこそ」（2014年、英国映画、121分）監督＝マシュー・ウォーチヤス 脚本＝スティヴン・ベレスフォード 出演＝ビル・ナイ、イメルダ・スタウトンほか ●【おことわり】先に書いた、この映画のテロップ等については、あくまで小西の記憶や印象に基づいて書いていることをおことわりしておきます。実際の映画はもっと感動すること請け合いです。嘘と思うなら、予告編をネット検索してご覧になって下さい。泣ける筈です。

2017年「週刊文春」ミステリーベストテン応募原稿

■私（小西）は日本推理作家協会の会員です。海野十三に関する資料集を2冊作った際に、柴野拓美さん（宇宙塵代表、故人）に勧められて2000年代初めに入会しました。協会事務局で創世ホールの取り組み（主として講演会企画）についてトークをしたこともあります。で、協会員には毎年10月になると『週刊文春』からミステリーベストテン特集号用のアンケート依頼が届きます。回答用紙は2つあり、国内版と海外版それぞれ5作を選ぶようになっていて、どちらか一方のジャンルに応募してもかまわないことになっています。11月初旬が締切で、約ひと月後12月上旬発行号の『週刊文春』に、集計結果が掲載されることになっています。各作品には寸評（選出理由のコメント）を書く欄もあり、私は過去にコメントが掲載されたことがありました。私はもっぱら国内版にこの数年間欠かさず応募しているのですが、好みが偏っているためか、殆どかすりもしないことがあります。特に、今年は回答した5作とも、見事にベスト20にさえ、全く入らないという結果になりました。せつかなので、小西が自信を持って選んだ国内版ミステリーベスト5を掲載しておきます。

●第1位 ●宇佐美まこと『愚者の毒』祥伝社文庫 2016年11月20日刊⇒書き下ろしの文庫作品が推理作家協会賞を受賞。ストーリー展開が非常にたくみ。著者は愛媛松山在住の人。地方には、こんな逸材がいるのだ。まいいりまし！

●第2位 ●松浦寿輝『名誉と恍惚』新潮社 2017年3月刊⇒非常に骨太な、壮大な、確固とした信念を貫いたゆるぎない大河のような作品。真のニヒルや無頼や透徹した強靱な意志がここにあり、作者に対して敬意を表したい。

●第3位 ●月村了衛『追憶の探偵』双葉社 2017年4月刊⇒快調・月村了衛の短編連作集。主人公は『特撮旬報』編集者・神部実花。彼女は特撮業界における人探しの達人。物語には人生の悲哀がにじみ、どの短編も余韻が美しく切ない。この安定感が、さすが。

●第4位 ●芦辺拓『ダブル・ミステリ』東京創元社 2016年12月刊⇒芦辺拓は、ミステリーにおける実験精神を常に熱くたぎらせている。その志を買う。表1側からのタテ組み小説と表4側からのヨコ組み小説。2編に挟まれる形で、真ん中に解決編を封印。どちらから読んでも物語は成立！

●第5位 ●大倉崇裕『クジャクを愛した容疑者』講談社 2017年6月⇒警視庁の動植物管理係の須藤警部補と薄（うすき）圭子巡査の掛け合いが抜群に面白い。

遠藤ミチロウ監督作品「SHIDAMYOJIN（しだみょうじん）」上映会、ご支援ありがとうございました

■12月16日に開催した【フクシマ・トクシマ連帯映画祭●遠藤ミチロウ監督主演作品「SHIDAMYOJIN（シダミョウジン／羊歯明神）」最終版】上映会+監督あいさつ+ライブは、当初チケット販売が伸びず、非常に心配しましたが（前年初めてミチロウさんイベントで

微妙に赤字を出したのです）、「徳島新聞」社会面の記事やFMびざんの番組で前日に出演して宣伝させていただいた（アビックの寺田成さんや同局の山口さん、堀部さんのおかげです）効果もあり、なんとか赤字は出さずに済みました。しかも香川から3人も筋金パンクスが来てくれて、私はガッチリ握手しました。来場者には、2月4日のサエキけんぞうさん講演会「日本にロックができるまで」のチラシもお配りしました。

■催しの後、ロビーでサイン会をしたのですが、その時サエキさん講演会のPRを遠藤ミチロウさんにも協力していただきました。その写真がこれです。



■ミチロウさんの左隣の美しい女性は、1980年前後の高校時代に日本でのラモーンズ・ファンクラブを結成し、東京六本木にあった東京ロッカーズの拠点・エスケンスタジオの看板を制作したグループの一人・館山百合子さんです。前にも書いたような気がしますが、館山さんは青森ご出身で現在は徳島にお住まいです。この方は、初期『フルズ・メイト』への執筆経験があり北村昌士氏さんの書き下ろし著作『キング・クリムゾン』（シンコーミュージック）の原稿清書は彼女が手がけたのです。凄くお話が面白い方なので、いつか館山さんのインタビューを掲載したいと思います。

ご期待下さい！ サエキけんぞう氏講演会「日本にロックができるまで！」

■2月4日開催のサエキけんぞうさん講演会に関連して、図書館カウンター前で1月中旬から特別展示をします。サエキさんの関係するバンドのレコードやCD、講演で触れる3人（ムッシュかまやつさん、加藤和彦さん、大瀧詠一さん）に関するスパイダース、サディスティック・ミカ・バンド、はっぴいえんどなどの作品、著作、特集雑誌、資料書籍を展示します。

■また2月3日午後には、TSUTAYA田宮店でサエキけんぞうさんのインスタ・イベント（前日祭）を開催予定。もちろんご本人が登場します。さらに講演会当日はアツと驚く趣向が予定されています。皆さん、ご期待下さい！

（2018年1月11日脱稿 文責＝小西昌幸）